

## パリ滞在記

孟 渤

パリでの長期滞在を始めたのは今年の四月からだ。その前に日本で二三年間、中国で二四年間過ごしてきた。中国出身の私にとって、来日した当初にいろんな意味でカルチャーショックを受けた。しかし、それをパリで受けたのとは比べ、マグニチュードは大分違う。

以下は私が体験した三つの小さな出来事だが、現在のフランス社会の一角を知る一つの窓口になるだろう。

パリに来て二カ月後、職場のイントラネットを通し、フランス人同僚が所有する一八九六年築のアパートを借りることができた。アパートの住民は妻と私以外、皆年寄りのフランス人だ。住み始めた頃、あるフランス人老夫婦といつも廊下で顔をあわせるのだが、その度にきまって長いフランス語で「挨拶」してくれる。どうも親しみがこもっていなかったようだ。妻は日本で少しフランス語を勉強したが、その時の老夫婦のご「挨拶」の内容を聞き取れなかった。半年後、妻がフランス語学校に通い続けたおかげで、老夫婦から何回もかけられたフランス語の内容がわかった。それはご「挨拶」というより、むしろ「注意」だ。つまり、「君らは脇にある階段を使いなさいよ」との内容だった。フランスの古いアパートには普通、二つの階段がある。一つは住民及び来客用で各階の正門に通じる。もう一つは同じ廊下の脇にあり、家事「使用人」用で各階の台所に通じる。私たちはいつも来客用の階段を使い、「ゴミ出しの際はその暗くて狭い「使用人」用の階段を使わなかつた。「使用人」と思われたのは、東洋人の顔付

きの「せい」かもしれない。妻がフランス語で私たちの「身分」を老夫婦に明かしたら、初めて笑顔付きの「ボンジュール」が老夫婦の口から出た。

パリに名前をついた道は約五十二〇〇本あると言われる。この間、方向音痴の私が同僚の送別会を終え、妻と一緒に歩いて帰宅する途中で迷子になった。時刻は夜二時過ぎだ。自宅まで徒歩二五分位の距離のはずだが、どうも黒人の多い別の地区に入ってしまったようだ。妻と私が躊躇した末、勇気を出して、知識人っぽい三千代ぐらいの黒人女性のかたに道を聞いた意外にこの人は英語も通じるし、道を丁寧に教えてくれた。お礼をしようとしたとき、相手の口からは「私がパリに生まれてから三〇年、初めて路傍でアジア人のかたに話をかけられた。ありがと。」との一語だ。

パリの博物館や美術館の数と質とも世界屈指に違いない。土日に他の予定がない場合、大体妻と一緒に博物館で時間を過ごしてきた。ある日、パリ郊外にある世界遺産を観光の際に、妻から「なぜここに黒人やアラブ人は来ないのかしら」と聞かれた。私が「信仰は違う。ここではキリスト教の世界だから、イスラム教を信仰する彼らは興味がないのだらうね」と言い返すと、「だって我々も仏教に近い信仰心を持つのに、興味津々で観てるじゃないの。動物園、自然公園とか野菜つかみ放題の農園などに行った時も黒人とアラブ系の方はほとんど見当たらなかつたわ。」と反論を始めた妻に、「入園料、交通費がかかるし、収入の低い彼らの生活にそんな余

裕はないだろう」と私が解釈したが、妻は「市内に無料公開のアメニティ施設も非常に多いのに、白人家族と東洋人観光客ばかりで、移民としての黒人とアラブ人はほとんどいないと思う」と更に突っ込んできた。「一概に言えないよ。君が行った時たまたま彼らが少なかっただけだ」と最後にごまかそうとしたのだが、自分の中では、妻の一連の反論に対し、適切な答えが用意できなかった。その答えは数週間後の海外出張の途中で得た。その日、出張先との打ち合わせが早いため、朝五時半にパリ市内から空港行きの電車に乗った。車内は満員だ。数人のビジネスマン風の白人以外ほとんどが黒人だ。彼らの顔に疲れと眠気以外に何の表情もなかった。暗い車内の光景はまさにアフリカで電車に乗ったような錯覚を起こさせるほどだ。こんなに朝早く郊外向けの電車に乗った黒人たちは明らかに海外出張のためではなく、恐らくパリ市内で夜勤を終えて郊外に帰宅する人々が空港近辺の物流工場などへ出勤する人々だろう。無料の余暇施設すら行く余裕のなかった彼らの姿はここにあった。



黒人が描く海岸風景に見入る白人の女の子（ニース海岸にて筆者撮影）

Meng Bo, 在パリ海外研究員

地域計量システム分析が専門。現在、OECDで「地域統合と経済発展」をテーマに研究活動。最近の著作には、「Impact of the Global Economic Crisis on Employment in the Asia-Pacific Region」 in Satoshi INOMATA and Yoko UCHIDA eds., Asia Beyond the Crisis -Visions from International Input-Output Analyses, IDE Spot Survey, No. 31, 2009. (co-authored with Satoshi INOMATA)がある。